

第1回「文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について～」（8/8 開催） モニター参加者レポート

連続オープンディスカッションモニター感想文

青木慎太郎

現在、奥会津地域では、地域の存続が危ぶまれるぐらいに過疎化、高齢化が進んでいます。その対策として、地域に人を呼び込む手段として「奥会津らしい」ものを探す取り組みが各所または各団体で行われているところです。

では、「奥会津らしい」とは一体何なのでしょう？それは国内外から多くの人を呼び込める風景なのでしょう、またはこの地域でしか味わえない特産品なのでしょう？

広域行政の一翼を担う只見川電源流域振興協議会（柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町（旧南郷村・伊南村・館岩村の地域）・檜枝岐村で構成され、福島県と各町村の職員が事務局として勤務し、只見川電源流域の各種振興策に取り組んでいます。）に所属し、この地域の活性化を目指して日々の業務にあたる私には、この「奥会津らしさ」を探すことが、とても大きく抽象的なテーマとなっています。

実際、皆さんも「奥会津らしさ」を表そうとすると、単に風景や特産品を挙げてしまうのではないかと思います。

私も奥会津に「今あるもの」だけから「奥会津らしさ」を探し出そうとして、すごく表面的なものと思うことや、本当にこれが「奥会津らしさ」を表しているものなのだろうかと感じてしまうことがありました。

今回、この「奥会津の周り方 第1回 文化の泉を掘る～三島町歴史文化基本構想について～」に参加することにより、この途方もなく大きくて抽象的なテーマに対するアプローチの仕方が見えてきたような気がしているところです。

つまり、「奥会津らしさ」を形作るものは、風景や特産品といった「今そこにあるもの」だけではなく、これまでこの地域の人々が紡いできた生活や風習など、いわゆる奥会津の文化がその大きな部分を占めているのではないかと考えるようになりました。

これまでの奥会津の人々が紡いできた文化、それは決して重要文化財や大きなお祭りばかりではなく、この地域に住まう人々が日常的に送ってきた生活であり、その生活の中で生まれる民具であったり、風習であったり、信仰であったりするのではないかと思います。

そして、この奥会津に住まう人々が日常の生活で紡いできた文化は、生活の近代化とともに消滅の危機にさらされているものも少なくありません。

いわば、私たちは「奥会津らしさ」を探して確立しようと言いながら、その「奥会津らしさ」の根底をなすものを捨て去りつつあったのではないのでしょうか。

この奥会津地域が今後も存続していくためには、地域内外の人々にとって魅力的な地域であることが求められ、魅力的な地域であるためには「奥会津らしさ」が感じられる地域でなくてはなりません。

そのためには、地域の人々が自分たちの暮らしがどのような歴史の上に成り立っているか

を意識し、理解し、そして後世に伝えていくことが非常に重要になってきます。

私たちの役割は、第4期只見川流域振興計画のスローガン「自然のなかにくらすいとなみ、100年先のみらいへ」が示す通り、100年先にも奥会津の地域が存続し、人々が生き生きと暮らしている地域を目指し、地域内の各集落の活性化を図っていくとにあります。

この役割を果たすため、地域内外の人にとって奥会津が魅力的な地域であるために各種施策に取り組んでいるところですが、この施策の根底には、地域の人々が自らの地域の営みに目を向け、そこから今の暮らしにどう結びついてきているのかをどう手助けしていけるかが重要なのではないかと、今回のオープンデスカッションを通して気づかされました。

また、今回のオープンデスカッションで、行政単位としての市町村は地域の文化の承継にとっては意味を成すものではなく、町村の枠を超えて同様の文化圏が存在し、その文化を承継していくためには、自治体の連携や団体を超えた連携が必要だというお話がありました。

これからの行政組織には、自分の自治体のみならず周辺自治体と連携した施策が求められており、この分野にも当然、広域的な連携が求められていることが改めて分かりました。

県内でも稀な広域行政体としての当協議会として、只見川流域の文化として広く町村の枠を超えて、連携して取り組んでいくことの必要性もまた今回のオープンデスカッションを通じて改めて認識できました。

この二つの気づきを心に刻みながら、今後も奥会津地域の振興のために取り組んでいきたいと思えます。

ありがとうございました。